

当事者研究を軸に、「やさしい世界」を目指す！

(3学期の方針)

咖喱 好太郎

★現状★

子どもたちから「何でこの世界はこんなに優しくないんだ」との要求？があった。だったら、世界を、変えていこうじゃないか。って段階。

① 当事者研究とは

当事者研究は、無責任な要求ではない。研究を通して、積極的に環境を変えていく運動。ただし、「当事者」ばかり注目すると、「内政干渉だ！」と突っぱねる、ワガママになってしまう(極端な話、薬物中毒者が服用したいと言えばその自由を許さなくてはいけなくなる)。だから、研究する。研究することで、当事者でありつつ外在化する。外在化することで、自己コントロールを放棄していく。これが、当事者研究。

② 当事者研究を通して目指すこと

当事者研究で発見があるのは、むしろ「聞く側」(その証拠に、当事者研究を通して、私が一番価値観を変えていった)。「聞く」ことで、「そうだったんだ…」となる。だから、自分たちの研究を周りに聞かせることで、積極的に環境(社会)を変えていく。

なお、本来これは、嫌なことがあったら「ちょっと聞いて！」と誰かに話し、「そーゆーことってあるよね」と意見交換することで、ちょっとした発見と、認知の(わずかな)アップデートをしていく、日常的な行為。多数派はこれができるが、少数派は「トラブルを起こす権利がない(避けられたり、有無を言わず薬で抑え込まれたり)」ため、当事者研究が必要だった。当事者研究を通して、当事者性を取り戻す。そういえば、当事者研究は「生きていくこと」自体を研究することなのかもしれない。

ただし、近年は多数派の子どもたちすらその機会を奪われている(藤井さんの言う、「顔の喪失」と関連している気がする)ため、多数派にとっても当事者研究は必要になるのではないか。おそらく、当事者性を失っているからこそ、困らなくなる気がする。透明な世界。だから、なおのこと、当事者研究を外部に発信する必要がある。

③ 当事者研究のその先

当事者研究を外部に発信する中で、きっと「生きるということは」という話になってくる。そこで、自分たちのもつ、自由だったり、平等だったり、そういった「平和に生きる権利」を考えていきたい。

個性を生かしながら、共存できる世界を目指す。社会(ものすごく息苦しい世の中)と自分との関係を、自分で再構築していく。社会の在り方を、発信していく。

④ 学級内クラブとの関係は

当事者研究は、楽しくやりたいが、やっぱりしんどい面も出てくると思う。だからこそ、学級内クラブは、どこまでも楽しくやりたい。楽しい活動は、頑張るエネルギーになるはず。それに、当事者研究だけでは、机上の空論になる。学級内クラブでの生々しい人間関

係が、当事者研究を深めるはず。

きっと、塩崎さんの言う「共鳴」って、そういうことじゃないかな。

⑤ 学級憲法との関係は

当事者研究の中で生まれていた「権利」を、学級憲法としていきたい。今の憲法は「行動目標」的なものが多い。それを、「やさしい社会の中で生きる権利」にしていきたい。そうならば、学級憲法は、わたしたちにとって、かけがえのないものになるんじゃないか。

⑥ 具体的な話

当事者研究を、する。今まで発見した3匹の妖怪を、もうちょっと詳しく見ていく。別の妖怪の場合も、あるかもしれない。

当事者研究の発表は、授業かな？って思う。道徳の時間に、お邪魔したい。ホントは、学級内クラブに来てくれる子たちにもやりたいけど、クラブの時間を奪うのは、ちょっと違う気がする。さりげなく痕跡を残しておくぐらいで、いいんじゃないかな。

咖喱さんと藤井さん ～セミナー後のMLでの議論～

地区セミナーの後に、メーリングリスト「かがり火」で咖喱さんと藤井さんの間で、実践についてのやりとりがありました。この内容も大事なことだな！と考え、掲載します。

☆ 咖喱です。（1月19日）

「当事者研究」が頭から離れません。

本日、図書館にて息子たちと本を借りていましたが、「この児童書の主人公のやっていることは当事者研究だなあ…」とか考えている自分がいました。どんどん頭でっかちになっている気がします。

うーむ。生活指導なのか何なのか、ぐっちゃぐっちゃです。とりあえず、他にアウトプットする先のない「実践の方針」を、ここに送らせてください（添付しました）。どこかに出していないと、抱えきれなさそうなので。

☆ 岐阜生研のみなさま（CC 基調委員会の皆様）（1月20日）

咖喱さんが当事者研究をやっているのか生活指導をやっているのか頭がぐちゃぐちゃになるというので、いま私が思っていることをざっくりと書いておきます。

昨今の全生研の基調提案の基底には「ケアと自治」の問題が流れていると思います。

教師が非常に困難な子どものケアを行って成功した実践が掲載されがちですが、それに疲れて休職する人も出てきています（塩崎さんの言ったカサンドラ症候群も、あるいは管理的学校との板ばさみで）。うまくいっていない実践では、困難を抱えた子に対するケアが、ほかの子どもから見てひいきと映るパターンが多く、それによって教師が孤立するケースも多いのではないかと思います。

で、子どもをケアするとはどういうことなのか、ということを考えたとき、教師がケアす

る、相互にケアする、自分をケアするなどということがあるのではないかと思うわけです。当事者研究は、基本的に問題の外在化ですから、子どもも教師も困難を抱え込むわけではありません。また、子ども相互のケアを実現するためには、優等生も生きづらさを抱えていることを自覚して、自分の固有性や自分をケアすることを考える必要があると思っていますし、それなしに、困った子をケアしろといっても、当事者性のないお世話や、やっかいな仕事に終わってしまうと思うのです。中身は異なるが、生きづらさを抱えた者同士としての相互ケアが必要なのではないのでしょうか。

他方、それぞれの生きづらさは、現代の一律主義・競争主義の社会がもたらしているものであり、それぞれの生きづらさを自分で、そして相互にケアしあう中で、ともに、自分たちの生きづらさを生み出している社会の構造の問題を対象化できるのではないかと思っています。そこに自治の契機があるのではないのでしょうか。

☆ また咖喱です。（1月20日）

咖喱レポートについて

藤井さん、どうもありがとうございます。分析と言うのかな？アドバイスと言うのかな？大変嬉しかったです。が。が。が。

＞ 他方、それぞれの生きづらさは、現代の一律主義・競争主義の社会がもたらしているものであり、それぞれの生きづらさを自分で、そして相互にケアしあう中で、ともに、自分たちの生きづらさを生み出している社会の構造の問題を対象化できるのではないかと思っています。そこに自治の契機があるのではないのでしょうか。

ああ！ごめんなさい！よく分かんねえです。「参考になりました」とか「勉強になりました」とか書いときゃいいかもなんですけど、

せつかく返信いただいたのに適当にごまかす気にもなれくて、正直に言っちゃいます。

前半はかろうじてついていけそうなんですけど、とくに「構造の問題の対象化」とか「自治の契機」とか、ちんぷんかんぷんです。あ！そういえば藤井さん、東海北陸で「本を読め」って言ってましたね！咖喱はもう少し本を読む必要があります…。

☆ 藤井です。（1月22日）

それぞれの生きづらさは、現代の一律主義・競争主義の社会がもたらしているものであり、
→発達障害の子どもの生きづらさは、「こうあらねばならない」という一律主義に適応できない問題、優勝劣敗の競争主義のなかで負け組になってしまう問題（受験を前提とした学びで、面白いと思える学びを存分に展開できない）、それらにとらわれている親や大人によるプレッシャーから来ているのではないのでしょうか。

→優等生の子どもの生きづらさは、「こうあらねばならない」という一律主義に過剰に適応していることからくる自分らしさの疎外の問題、競争主義のなかで負け組にならないよう強迫的に学習している問題それらにとらわれている親や大人によるプレッシャーから来ているのではないのでしょうか。

それぞれの生きづらさを自分で、

→各自がなんで自分は生きづらいのだろうと考えたときに、その問題にぶつかる

そして相互にケアしあう中で、

→他者の生きづらさの背景にある問題を知る

ともに、自分たちの行きづらさを生み出している社会の構造の問題を対象化できるのではないか

→ 自分と特別支援学級のあの子（あるいは通常学級の劣等生／優等生）は、まったく別だとおもっていたけれど、生きづらさの原因が案外同じなんじゃないかということに気づける可能性がある。そこから、そういう社会の構造そのものを改善すべきではないかということになり、社会構造が、働きかけの対象となる。

そこに自治の契機があるのではないのでしょうか。

→自分たちの生きる世界は、自分たちでつくりかえる。つまり自治になる。

これでわかりますかねえ？

☆ 咖喱です。（1月22日）

藤井さん、ありがとうございます！大変よく分かりました…と思います。

最近、学級の子どもたちと話していて、

- ・どうも俺たちと同じ生きづらさをもっている子がいるっぽい
- ・テストでいい点をとる生徒も、勉強のことで生きづららしい
- ・あいつら（通常学級）よりもおれたちの方がよっぽど人間らしいんじゃないか
- ・（「生きづらいかどうかわからん」と語った交流学級の生徒について）自分が生きづらいかどうか分からないなんて大丈夫かよ

などの話題が出ました。この辺りの言葉が、「生きづらさの背景を知る」ということになるのでしょうか。まだ、背景までは届いていませんが。

今後は、その背景を（どうにかして）相互にケアし合う中で、以前に子どもたちから出た「なんで今の世の中はこんなにも生きづらいじゃ」の発言につなげていくと、いいのかなあ、なんて解釈しています。

お互いの生きづらさを知る事自体が、ケアなのかも？とも思いますが。だとすれば、「背景」とは、学校や社会の構造ということか？うーむ。

で、「今の社会（学校）ヤバくね？」を起点に、自分たちの世界を自分たちで作り変えると、自治になる。そうなると、学級憲法も、生きてくる。

こんな感じで、だいたいあってますか???

あと、少々話題がそれますが、昨日、湯舟の中でふと

「あ、私、そういえば最近、子どもたちの発達障害のこと、忘れてたわ！」と気が付きました。

発達障害（ASD）というひとくくりの言葉から、「〇〇な生きづらさなのダイ、〇〇な生きづらさのユウ、〇〇な生きづらさのナツオ」に代わっていたんです。

これ、私にとって、ものすごい大発見です。当事者性を取り戻すって、こういうことなんだろうなあ、というのが今の考えです。

「〇〇な生きづらさの□□くん」ととらえると、私も楽です。私も、子どもたちとケアし合っているんだなー、なんて思っています。この状態ならカサンドリませんね。